デューイの「occupation」の日本語訳についての考察

刁　克

1. はじめに

デューイは1919年の2ヶ月に及ぶ東京帝国大学での講義で、日本の学者からの注目を浴びた。その後間もなく、デューイの重要な著作の一つ「民主主義と教育」が帆足理一郎により翻訳され、同年洛陽堂により出版された[1]。その後、デューイの論述に関する研究が一時行われたが、戦前の国内情勢により中断した。第二次世界大戦後、デューイの理論が再び注目され、関連する論文が多く発表され、デューイの著作はいくつかの日本語翻訳版が出された。近年、デューイの理論の全体像への把握というよりむしろ、play, work, occupation など具体化されたデューイ理論の概念についての探求が盛んに行われてきた。

ところで、これらの研究を調べてみると、デューイ理論の重要概念の「occupation」について、実にいろいろな日本語の訳し方が持ち込まれ、今も定着されようとしない。時にデューイのもう一つの重要概念「work」と同じ日本語訳で論じられたこともある。そして、最近の研究において、英単語そのまま使うか、プレー、オキュペーションなど、カタカナで表示することが目立ってきた。デューイの論述は教育哲学と位置づけられているが、同一概念に対し、異なる言葉で議論するのは、理論に対する認識の欠如が存在しているのではないかと思われる。また、デューイ研究において、同じ概念を異なる日本語で論述すると、研究者間の意思疎通が阻害され、研究成果も活用し難いと考えられる。そのため、筆者はデューイの概念そのものを探求するのではなく、「occupation」という概念の日本語訳について整理、検討し、これからのデューイ研究に役立とうとする。

2. 研究の範囲・方法

筆者が関連する資料を調べた結果、play, work などに対し、ほとんど定着されている訳語が用いられているが、重要な概念としての「occupation」に対し、職業、作業、仕事、オキュペーションなどの用語が使われていた。特に河村望の翻訳において、「occupation」と「work」両方を「仕事」と訳す場合もある。重要な概念に対し、異なる用語を使うのは、認識の甘さであるか、それとも、言語そのものの変化であるか、筆者は疑問を抱えていた。それを解くために、本論は、今までの翻訳文や、論著を調査し、その原因を探ろうとする。

デューイの著書において、「occupation」は特に「学校と社会」及び「民主主義と教育」において多く論じられている。そして、「民主主義と教育」の第15章は「学校教育における遊びと仕事」をテーマとし、「play」、「work」、「occupation」の関係を多く論じている。そのため、本論は特にこの章を焦点とし、訳語を収集する。他に、「occupation」をキーワードとする論文を収集し、「occupation」の訳語を分析する。また、ほぼ日本と同じ時期からデューイ研究が行われてきた中国の翻訳と論文を分析し、日本語と中国語の訳し方を比較する。最後に、時代別に英和辞典での「occupation」の解釈を整理し、分析する。また、訳文において、「occupation」と深い関係を持っている概念「work」が「occupation」と同じ日本語で訳されたことが多い。そのため、二つの概念の訳し方を対比し論じる必要があると考えられる。本論は以上の手続きを通して、「occupation」の訳し方をより明確にしたい。

3. 翻訳著書における「occupation」の日本語訳

今、知られている最初の日本語訳は帆足訳洛陽堂出版の「民主主義と教育」である。戦後2回再版された。その後、いくつかの翻訳が出版されたが、今、入手できる翻訳版には、第15章の内容を省略したものが多く、本論には扱わない。1970年代に入って、松野[4]の翻訳版が出版され、2000年に入って河村[7]の翻訳版も出版された。本論には、主にこの3つの翻訳版を取り入れる。

3．1　帆足理一郎訳教育哲学概論

デューイ訪日後間もなく、帆足は〝Democracy and Education〟を翻訳し、これが「教育哲学概論」[3]という書名で、洛陽堂によって出版された。これはデューイ著作の最初の日本語訳であると言われている。帆足訳教育哲学概論において、「PLAY AND WORK IN THE CURRICULUM」は「課程に於ける遊戯と作業」と、「The Place of Active Occupations in Education」は「教育上に於ける業務の地位」と、「Available Occupations」は「有効なる業務」と訳されていた。そして、他の「play and work」は「遊戯と作業」と訳されていた。帆足は「occupation= 業務」、「work= 作業」、「play= 遊戯」と、一対一の概念対応関係において翻訳を進めた。このハッキリとした対応関係は1959年、1973年春秋社により刊行された改定新版においても、一貫された。

3．2　松野安男訳「民主主義と教育」

1975年岩波書店に出版された松野安男訳「民主主義と教育」[4]において、「PLAY AND WORK IN THE CURRICULUM」は「教育課程における遊びと仕事」と、「The Place of Active Occupations in Education」は「教育における活動的な作業の位置」と訳された。「Available Occupations」は「有効な作業」と訳されていた。そして、ほかの「play and work」は「遊びや仕事」と訳されていた。即ち、松野の翻訳において、occupation は「作業」、work は「仕事」として使い分けていた。また、松野の翻訳において、「work」を動詞として「働く」と訳した場合もある。

3．3　金丸弘幸訳民主主義と教育

1984年西洋の教育思想全20巻の第19巻として、金丸訳の「民主主義と教育」[6]が玉川大学出版部により出版された。第15章において、金丸は「PLAY AND WORK IN THE CURRICULUM」を「教育課程における遊戯と仕事」と訳した。「The Place of Active Occupations in Education」を「教育における活動的作業の位置」と訳した。そして、「Available Occupations」を「有効な作業」と、「play and work」を「遊戯と仕事」と、「outside occupations」を「外での作業」と訳した。金丸は「occupation」＝「作業」、「work」＝「仕事」と使い分けていた。

3．4　河村望訳民主主義と教育

2000年人間の科学新社により出版されたデューイ＝ミード著作集9民主主義と教育[7]は河村によって翻訳された。河村の翻訳において、「PLAY AND WORK IN THE CURRICULUM」は「カリキュラムにおける遊びと仕事」と、「The Place of Active Occupations in Education」は「教育における活動的作業の位置」と訳されていた。「Available Occupations」は「役に立つ作業」と訳されていた。そして他の「play and work」は「遊びと仕事」と訳されていた。ところで、「outside occupations」の「occupations」は「仕事」と、また「modes of occupation」は「仕事の様式」と訳されていた。

以上、述べられた「occupation」、「work」、「play」の訳し方は表1に纏められる。

表1で示したように、帆足以後の翻訳はoccupationについて、「作業」を使うケースが多く、「work」について「仕事」を使うケースが多い。また、河村以外の訳者は同じ作品において、「occupation」と「work」とを異なる言葉で訳し、区別した。河村は「occupation」と「work」を同じ言葉「仕事」で訳した場合があり、厳格に区別されていないと言える。

表1「occupation」などの訳し方

著者／訳文	occupation	work	play	出版年
帆足	業務	作業	遊戯	1919／1959
松野	作業	仕事、働く	遊び	1975
金丸	作業	仕事	遊び	1984
河村	作業、仕事、職業	仕事	遊び	2000

表1で現れた二つの課題が検証したい。一つは、1950年代以後、時代の変化により言葉自体が変化されたのか。もう一つは、河村の訳文において「occupation」を「仕事」に訳すのは合理的なのか。言葉の変化があるかどうかについて、まず、翻訳文より多く発表されたデューイ研究の論文を検証する。そして、戦前デューイ研究の分野において、深く関わりを持つ中国の学者たちの訳文と論文を検証したい。最後に時代別の英和辞書の内容を検証したい。「occupation」と「work」との区別について、今までデューイ研究者が行った原作に基づく判別では、結論が得られにくいので、筆者は量的な手法を用いて検証したい。

4. 同時代の「occupation」の中国語訳

デューイは1919年4月日本を離れ、上海から中国での旅を始めた。その後2年間に渡って、中国各地で講演を行って、中国の教育、思想革新に大きな影響を与えた。当時、デューイの著作も多く翻訳されたと考えられるが、現存するものは少ない。鄒恩潤譯述、1928年上海商務印書館に出版された「民本主義与教育」[2]は筆者が入手

表2　帆足と鄒の訳し方の違い

著者／訳文	occupation	work	play	出版年
帆足	業務	作業	遊戯	1919
鄒	作業	工作	遊戯	1928
松野	作業	仕事、働く	遊び	1975
金丸	作業	仕事	遊び	1984
河村	作業、仕事、職業	仕事	遊び	2000

できる一番古い中国語版であった。鄒は「play」を「遊戯」、「work」を「工作」、「occupation」を「作業」と訳していた。これを日本語訳と比較すれば、表2で示したような違いがある。

表2で示したように、鄒の「occupation」の訳し方は戦後の松野、河村（一部）の訳し方と同様である。帆足とは異なっていた。また、中国語の「工作」は日本語の「仕事、働く、及び職業」に近い意味を持っていて、中日辞書では、一般的に「仕事」と訳す。中国語訳版は参考的な意味を持っていないかもしれないが、当時日中間の研究者の往来が多く、少なくとも1930年代から「occupation」と「作業」との中国語での対応関係が日中両国の研究者に知られていた。

5．日本語論文における「occupation」の訳し方

デューイの著書の翻訳以外、デューイを研究する論文も今まで数多く発表されていた。

1946年中和書院に出版された永野芳夫の「デューイの教育哲学」[14]はデューイが北京大学でした講演の中国語筆記を底本としたものである。「第三講児童方面－教育の根基」において、『今日提出して講じますのは、「遊戯」及び「工作」（作業）と本能の訓練との関係であります。遊戯と作業は、身体的機能に対して…』と記述されていた。そして、「做戯（Dramatization）と工作（Work）」に、著者は「做戯は演戯、工作は作業。做は作の俗字」と説明文を入れた。永野は「work」を「作業」と解説したので、帆足の訳し方に近いと考えられる。

小林（1978）[15]は「デューイ・スクールのoccupationについて」をテーマとした論文において、「学校活動の中心は、これまで教科目といわれてきたものよりもむしろoccupationのなかに求められなければならない」などを論じ、「occupation」のまま議論を進めた。また、引用として、「教科目というよりもむしろ活動的な作業すなわちoccupation －」と挙げられた。これは対応関係を明確したものではないが、少なくとも、「作業」との関連性を示した。

松本[16]は1999年に発表した「デューイの興味論についての一考察（Ⅱ）」の副題において、「仕事（occupation）としての興味と努力」と記述した。他に「子どもの仕事（occupation）への興味…」など、「occupation」と「仕事」

との対応関係を明確にし、使い分けていた。

伊藤博美（2000）[17]は「遊び（play）」と「オキュペーション（occupation）」と「仕事（work）」で議論を重ねた。また、『「遊び」は一種の〈active occupations〉である』と論じた。〈active occupations〉については、適当な日本語訳が提示されなかった。国語辞書[8]を開いてみたら、「オキュペーション」の項目がない。というのは、日本語としての認知度がまだ低く、日本語としての理解が難しい。

森[18]は2002年に発表した『デューイ・スクールにおける「オキュペーション」（occupation）の実践的考察』において、「オキュペーション」を用いて、「occupation」についての論を進めた。ところで、2007年の論文[21]において、『「仕事（occupation）」の位置づけ』、「多様な形態の活動的な仕事〔active occupation〕を学校に導入する」など、「occupation」と「仕事」との訳語の対応関係を示した同時に、『デューイは「仕事（オキュペーション）」、すなわち、「個人のデューイ・スクールのカリキュラムにおける「仕事（occupation）」の位置づけについて…』のように「occupation」と「オキュペーション」の併用を行った。森によれば、内容は「occupation」、枠組みは「オキュペーション」で区別して論じている。

千賀ら（2003）[19]は「社会的側面にもとづいて代表的な仕事（occupation）が選択されるべきであり」や「手作業や大工仕事といった仕事（occupation）の形態をとる活動」などと、「occupation」と「仕事」との対応関係を示した。

飯塚（2006）[20]は「play」と「work」に対し、「遊び」と「仕事」で対応した。以上の論文から見ると、デューイ研究において、「occupation」や「work」の日本語訳について、決められたルールがないようである。そして、近年、「オキュペーション」という表現が出たが、「作業」、「仕事」、「オキューペーション」の訳し方がそのまま使われている傾向も見られる。これは表3に纏められる。

表3により、「occupation」について、ローマ字、カタカナの表示で、或いは「仕事」に訳して論じることが一般的ある。そして70年代以後、3種類の表現方法がどちらでも偏りがなく、一般的に使われているようである。一方、帆足の訳文に現れた「業務」の訳し方は殆ど見当たらないようになった。

表3　日本語論文における occupation の訳し方

訳文／出現状況	1946	1978	1999	2000	2002	2003	2006	2007
occupation		小林		伊藤	森	千賀		森
オキューペーション			伊藤		森		飯塚	森
仕事			松本			千賀		森

6．中国語論文における「occupation」の訳し方

中国におけるデューイ研究は日本と同じように戦前から行われてきたが、戦争の影響で、残された文献が少ない。中国大陸の共産党政権が成立してから、1984年の改革開放政策の実行まで、中国大陸において、デューイ研究が当時の政治状況の影響で自由な発想ができないものの、他の形で存続され、いくつかの論文が発表された。毛礼鋭は[22]英語の文献が入手しにくい時代において、鄒訳[2]の「民衆主義与教育」を頼りに、政治情勢による言葉の使い方があるものの、デューイの教育思想を詳しく分析した。毛は鄒訳本を頼りにしたので、当然「occupation」は「作業」であって、「work」は「工作」であるように、考えていたのではないかと思われる。

また、王（1984）[23]は原文「occupation」の内容を「作業」で論じた。論文において（p. 47）『〝作業〟：occupation、亦可訳作〝職業〟』と解釈した。

張[24]も同じように、鄒[2]の訳文を重要な参考文献として論文を構成したので、鄒の訳に従って「作業」で論文を構成した。要するに、中国大陸において、多くの研

究者が鄒の訳文に頼らなければならないので、一般的に「作業」を使って議論を行った。改革開放後、研究において、政治的な色合いが薄くなり、原文も入手できるようになった。それにしても、李瑾（2001）[25]の論文では、「occupation」を「作業」で訳し、議論を重ねた。

比較のため、台湾のデューイ研究論文も考察してみた。林（2005）[26]は教育内容を論じたとき、デューイの「活動課程」（the curricula of activities）について、「他説：活動作業在教育上之所以有価値、因其能代表社會的情境。…」と引用で説明した。デューイの Experience and Education を検索してみると、「活動作業」は「active occupations」の訳文に当たる。勝（2007）[27]の論文にはデューイの学校と社会との関係を論じたところ、「他要求學校成為一個雛型的社會、「作業」是它的活動的核心、通過各種作業、學校將成為一種生動的真正的社會生活形式」と「作業」で議論をすすめていた（p.42）。そして身体教育を論じたところ、鄒訳の《民主（本）主義與教育》の内容が重要な論証として引用された（p.45-46）。勝の論文に「occupation」の訳し方を明確にしていないが、『《民主（本）主義與教育》一書的第十五章中所提到的：「課程包括一定的遊戯與主動参与的作業、…」』との引用から、勝が鄒のように、「occupation」＝「作業」であった訳し方を継承していると考えられる。

以上、中国語論文の「occupation」の訳し方を見てみると、中国語において、デューイの「occupation」を「作業」と訳す方法がほぼ定着されていると考えられる。

7．辞書における「occupation」と「work」の解釈

時代の変化とともに、言語そのものも変化しつつある。そして、occupation などの英単語に対応する日本語の単語も変化する可能性もあると考えられる。それを明らかにするために、筆者は英単語と日本語との対応関係を考察した。

齋藤（1915）[10]著英和中辞典によれば、「occupation」は従事、職業、業務の意味がある。また、名詞としての「work」は働き、労働、仕事、勉強、職業、工作などと解釈された。

須賀ら（1916）の英和辞典[11]を調べると、「occupation」が「職業（時間労力ヲ占ムルモノ）」と解釈されていた。そして、「work」については、「仕事、労働、作品、働ラク、

運転スル」と解釈されていた。

1970年出版された岩波英和大辞[12]には、「occupation」が「業務、仕事、職業、職」と解釈されていた。そして、「work」について、「仕事、労働、努力、作品等」と解釈されていた。

2001年出版されたジーニアス英和辞典第3版[13]には、「occupation」が「職業、仕事、職、業（種）：（仕事・趣味などとして）従事すること、暇つぶし《日本語の「職業」に最も近い語》」と解釈されている。「work」については、「仕事、労働、作業、任務、成果、研究、職業」と解釈されていた。

ここで、集めた資料には当時の用語の使用状況をすべて表すことができないが、明らかに、時代の変化に伴い、一つのことばがより多くの場に使われ、より多くの意味が持たされるような傾向がある。また、以上の資料によると、帆足が生活した時代にも「work」を「仕事」に訳し、議論することができる。そして、少なくとも70年代以後、「occupation」と「work」を同じ言葉「仕事」で訳す可能性が出てきた。

8. 量的手法による河村訳文の検証

表1で示したように、河村の訳文には「occupation」と「work」が同じ著書で同時に「仕事」と訳すことがある。当然、こういう訳し方には厳密性が欠如し、研究者に批判される。しかし、辞書についての考察によって、70年代以後、両方とも「仕事」に訳すことが明記されているので、まったく根拠がないとは言えない。この点について、原文の「occupation」或いは「work」に対し、どういう日本語を用いたら一番適当であるか、結論が出られるところまで議論しがたい。なぜなら、もともと異なる言語の間には一対一の対応関係が存在しないからである。それにしても、同一の著書で同じ言葉で異なる原語を訳すのはやはり適切とは言い難い。筆者は両方の言葉がどちらの日本語に訳していいかより、同じ言葉で訳していいかという問題を、まず解けたい。こうすると、この二つの原語が同じ意味合いで使われているか否か、明確にする必要がある。

同一の意味合いでの使用があるか否かについて、研究者の解釈に頼るなら、恐らく各々の確執に落ちる。そし

て、筆者はそのような主観的な認識によらずにより客観的に量的手法を用いたい。量的に単語間の意味合いを探る手法としてLatent Semantic Analysis（LSA, 潜在意味分析）が挙げられる。

8．1　LSAについて

潜在意味分析（LSA）は、大きなテキストコーパスを統計計算で分析し、単語の文脈上の意味を抽出あるいは表現するための理論と方法である。LSAは生のテキストを使って、単語、単独の文字例或いは意味的に区分されたセンテンス、節、段落を解析する。LSAは、与えられたすべての単語（現れていない、潜在的単語も含める）の文脈的な集合に単語意味の類似性を推測するための相互制約のセットと、相互関連の単語のセットが含まれているという考え方に基づく。

LSAはまずテキストをマトリックスで表現する。行にそれぞれの唯一の単語を表し、各列にテキストの一節或いは他の文脈的な区分を表す。各セルにその節（或いは文脈的な区分）における単語の出現頻度を表す。そして、このマトリックスに特異値分解（singular value decomposition, SVD. 線形代数学における、行列に対する行列分解の一手法）を行う。元のマトリックスを[X]とし、特異値分解をすると、3つの別の行列[W]、[S]、[P]'の積（式1）で表される。

$$[X] = [W]\,[S]\,[P]' \qquad (1)$$

この内[W]は直交の値のベクトルで元の行の要素を評価し、[P]'は同じ方法で元の列の要素を評価する。[S]は対角行列であり、[X]の分解、復元される時の評価値が含まれている。ここですべてのマトリックスが元のマトリックスの最小次元により完全に分解できる数学定理に用いられている。そして、最小限の要素しか使われていない場合、復元されたマトリックスは最小の正方形であり、最適合化された。ここで、単に最も小さいほうから対角行列の係数を削除すれば、分解の次元数が縮小できる。このような次元縮小のステップによって、最適化された[X']が復元される。元のマトリックスによって推定されたコンテキストでの用語の頻度がより大きくか、それともより小さくなるように変化する。また、いくつかの現れていなかった要素が断片的に現われるようになる。こうすると、このテキストで最も使われている抽象

的概念間の関係が再評価できる。その評価に基づいて、用語間或いは文書間の関連性を探ることができる。

8．2　LSAを利用する分析作業

河村の翻訳[7]において、「work」を「仕事」に訳したほか、「occupation」も、「仕事」に訳した場合もある。これらの翻訳が適当かどうかを、原文において「occupation」或いは「work」との相関性が強いか否かを評価しようとする。Democracy and education の第15章から河村の翻訳に、「仕事」と訳された「occupation」の箇所に対応する英語原文を探しだす。その結果、次のような語とセンテンスが抽出された。

それらのセンテンスを文脈的なセットとし、Democracy and education の第15章の原文をオリジナルテキストの集合とし、LSAに適用すると、表5のように、相関関係が現れる。

表5から分析してみると、「work」と同じように「仕事」と訳した各所は「work」に無関係とは言い切れない。但し、「modes of occupation」や「significance of the occupation」の箇所は「work」より、「occupation」のほうが強い相関性を持っていることを示していた。要

表4　河村訳文の問題箇所

	用　語	センテンス
M1	outside occupations	In pioneer times, for example, outside occupations gave a definite and valuable intellectual and moral training.
M2	modes of occupation	Outdoor excursions, gardening, cooking, sewing, printing, book-binding, weaving, painting, drawing, singing, dramatization, story-telling, reading and writing as active pursuits with social aims (not as mere exercises for acquiring skill for future use), in addition to a countless variety of plays and games, designate some of the modes of occupation.
M3	active occupations	The demand is for materials which have already been subjected to the perfecting work of mind: a demand which shows itself in the subject matter of active occupations quite as well as in academic book learning.
M4	active occupations	But it is time for a positive statement. Aside from the fact that active occupations represent things to do, not studies, their educational significance consists in the fact that they may typify social situations.
M5	school occupations	The illustration is intended to apply, of course, to other school occupations,–wood-working, cooking, and on through the list.
M6	significance of the occupation	If in some cases, pecuniary recognition is also a result of an action, though not the chief motive for it, that fact may well increase the significance of the occupation.

するに、「work」と同じ日本語で訳すより、「work」と区別し、「occupation」に寄せられる日本語訳がもっと原文の文脈に適合すると解釈される。

9. まとめ

「occupation」や「work」の日本語訳文の対応関係を明らかにするため、筆者は入手できる今まで出版され、発表された論著を考察した。その結果、以下のことが分かった。

- 「occupation」と「work」の訳文について、帆足の「業務」と「作業」の訳し方は、現在殆ど見当たらない。その代わりに、「作業」と「仕事」の用語が広く使われている。そのほか、ローマ字のまま使われているケースも多い。
- 辞書を調査した結果、時代の変化により、単語自体が複雑化する。そのため、同一原語に対応する翻訳語が量的に増え、訳文の対応関係も複雑化し、曖昧さが増えてきた。
- 中国語での翻訳語は殆ど変わっていない。時代の変

表5　occupation と work との相関性

Document	occupation	work
occupation	1	0.33
work	0.33	1
M1	0.46	0.41
M2	0.91	0.35
M3	0.22	0.25
M4	0.40	0.35
M5	0.28	0.30
M6	0.85	0.38

化により、必ずしも訳語の曖昧さが増えるとは限らない。

- 河村の訳文の中に同じ言葉で異なる原語を訳すところを量的方法で検証した。1つのセンテンスに「occupation」と「work」との相関は差があり、同じ日本語で訳すことは不適切であるという結論が得られた。
- ローマ字とカタカナの表記を除けば、「occupation」に対し「作業」がよく使われている。

本稿は量的な手法を用いて河村の訳文の適切さを単語の相関で検証した。そして、「occupation」がどういう言語環境において使用されたかについて収集した資料を分析した結果、「occupation」に対し「作業」がよく使われていることが分かった。しかし、本稿はどの単語を使えば、より適切かについて検討を行っていない。なぜなら、それは言語の使い方の問題ではなく、単語を概念の次元で検討すべきであると考えている。それを明確するために、論理的な判定基準を立てる必要がある。

参考文献

[1] 帆足理一郎（1919）訳、教育哲学概論、洛陽堂。
[2] 鄒恩潤譯述（1928）、民本主義与教育、商務印書館。
[3] 永野芳夫（1946）デューイの教育哲学、中和書院。
[4] 松野安男（1975）訳、民主主義と教育、下。岩波書店。
[5] 稲葉宏雄（1993）大正期におけるデューイ教育思想の理解と解釈。
[6] 金丸弘幸（1984）訳、民主主義と教育－西洋の教育思想19－。玉川大学出版部。
[7] 河村望（2000）訳、デューイ＝ミード著作集.9 民主主義と教育。人間の科学社（旧名）。
[8] 新村出編集（1998）広辞苑第五版、岩波書店。
[9] 相原茂（2006）日中辞典、講談社。
[10] 齋藤秀三郎著（1915）熟語本位英和中辭典。正則英語學校出版部日英社。
[11] 須賀清一・鶴見正平・浅地昇（1916）語源本位英和辞典：単語記憶の鍵。広島中学校英語研究部編、広島積善館。
[12] 中島文雄（1970）岩波英和大辞典。岩波書店。

[13] 小西友七・南出康世（2001）ジーニアス英和辞典第3版。大修館書店。
[14] 永野芳夫（1946）デューイの教育哲学。中和書院。
[15] 小林恵（1978）デューイ・スクールのOccupationについて．教育方法学研究，25-33，教育方法学研究会。
[16] 松本恭子（1999）デューイの興味論についての一考察（Ⅱ）仕事（occupations）としての興味と努力。日本デューイ学会紀要40，58～64，日本デューイ学会。
[17] 伊藤博美（2000）「遊び」の教育的意義の再検討－デューイにおける「遊び（play）」と「オキュペーション（occupation）」概念の関係を中心に。名古屋自由学院短期大学研究紀要，9-20，名古屋自由学院短期大学／名古屋自由学院短期大学総務委員会。
[18] 森久佳（2002）デューイ・スクールにおける「オキュペーション」（occupation）の実践的考察 －低学年の活動例を中心として 関西教育学会研究紀要，17-33，関西教育学会。
[19] 千賀愛、高橋智（2003）デューイ実験学校と子どもの発達的ニーズに応じるカリキュラム編成論。東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第27集、55-75.
[20] 飯塚順子（2006）デューイによる「遊び」の捉え方について。教育方法学研究、199-218，教育方法学研究会。
[21] 森久佳（2007）デューイ・スクールのカリキュラムにおける「仕事（occupation）」の位置づけについて。愛知江南短期大学紀要、36(2007)，47-66。
[22] 毛礼鋭（1957）杜威教育思想的反動実質。北京師範大学学報（社会科学版），17-56.
[23] 王ホウ雄（1984）杜威職業教育思想述評。比較教育研究，45-48.
[24] 張法（昆王）（1984）杜威《民主主義與教育》中的批判継承問題。教育研究と実験，89-95.
[25] 李瑾（2001）〝経験〟在杜威教育思想中的重要性。昆明師範高等専科学校学報、2001年23巻3期。
[26] 林志顕（2005）杜威的社會論教育理念之探討。「臺南大學報」第39巻第1期教育類（民國94年）、國立臺南大學、41-62.
[27] 勝徳政（2007）杜威体育理論之研究。塀東教育大学学報第二十九期－教育、35-66.
[28] Deerwester, S., Dumais, S. T., Furnas, G. W., Landauer, T. K., & Harshman, R. (1990). Indexing By

Latent Semantic Analysis. Journal of the American Society For Information Science, 41, 391-407.

[29] Landauer, T. K., Foltz, P. W., & Laham, D. (1998) . Introduction to Latent emantic Analysis. Discourse Processes, 25, 259-284.

[30] http://lsa.colorado.edu/

[31] http://www.ilt.columbia.edu/publications/dewey.Html

[32] http://books.google.com/books

[33] http://www.ruby-lang.org/

[34] 杉浦宏編著、デューイ研究の現在：杉浦宏教授古稀記念論文集、25-44. 日本教育研究センター。